岐大のいぶき
特別号
2018.05
SPECIAL ISSUE Vol.3

published by
岐阜大学

これからの地域を担う人材育成

【特別対談】
2008年ノーベル物理学賞 受賞
益川 敏英 氏

岐阜県観光連盟 会長
岸野 吉晃 氏

株式会社インフォファーム
取締役会長
辻 正 氏

セイノーホールディングス株式会社
代表取締役社長
田口 義隆 氏

岐阜大学 学長
森脇 久隆

森脇学長と外部有識者との対談集［3］

岐阜大学の将来ビジョン（森脇ビジョン）
イメージ図

国立大学は2004年に国立大学法人となり、以来、6年を一つの期間として改革を進めてきました。第1期は2004年から、第2期は2010年から、第3期は2016年4月から始まっています。この6年間の計画、また、2025年問題に向けての10年先を見据えた計画を、この「岐阜大学の将来ビジョン（森脇ビジョン）」に示しております。

岐阜大学の将来ビジョン（森脇ビジョン）に示した5つの様々な戦略（教育、研究、社会貢献、国際化、大学病院）での取組について、学外の有識者の方々と対談いたしました。

岐阜大学 学長 森脇 久隆

従来の就職のあり方が変化する中で、
インターンシップによる教育は大きな意義がある。
セイノーホールディングス株式会社
代表取締役社長 田口 義隆氏
× 岐阜大学 学長 森脇 久隆 …… 4

IT化の波に乗り事業拡大を続ける一方で、要職を歴任。
戦争での悲惨な体験から、何事も断らない姿勢を貫く。
株式会社インフォファーム
取締役会長 辻 正氏
× 岐阜大学 学長 森脇 久隆 …… 8

外国人観光客も増加し、盛り上がりを見せる飛騨地域。
一方で、長良川周辺をいかに活性化していくかが課題。
岐阜県観光連盟
会長 岸野 吉晃氏
× 岐阜大学 学長 森脇 久隆 ……12

特別対談
若い人には、憧れとロマンを持ってほしい。
そこに近づく努力が成長への力になる。
2008年ノーベル物理学賞 受賞
益川 敏英氏
× 岐阜大学 学長 森脇 久隆 ……16

【表紙左下のイメージ図について】
これは岐阜大学の将来ビジョン（森脇ビジョン）をモデル化してイメージ図にし、地域の中核たる岐阜大学が、人・物・情報を地域社会にもたらし、さらに国際社会とも呼応しつつ、相互に発展していく様子を表したものです。

岐阜大学の将来ビジョン（森脇ビジョン）

【2025年に向けて】

「地域活性化の中核拠点であると同時に、
強み・特色を有する分野において
全国的・国際的な教育・研究拠点の形成」
を目指します。

【特別対談】

田口 義隆氏 略歴

昭和60年　西濃運輸（株）に入社
昭和63年　セイノーアメリカINC. 社長
平成15年　西濃運輸（株）代表取締役社長に就任
平成17年　セイノーホールディングス（株）に商号変更し、同社代表取締役社長
　　その他 西濃運輸（株）代表取締役社長をはじめ、セイノーグループ各社役員を兼務
平成21年　西濃運輸（株）代表取締役
公職は岐阜県トラック協会会長、大垣商工会議所副会頭 等

セイノーホールディングス株式会社
代表取締役社長
田口 義隆氏
×
岐阜大学 学長
森脇 久隆

従来の就職のあり方が変化する中で、インターンシップによる教育は大きな意義がある。

学長：岐阜大学では、私が学長に就任した3年前に、2025年に向けた新たなビジョンを掲げました。その柱となるのが、岐阜の地域活性化の中核拠点になること、そして、強みと特色のある分野において国際的な研究拠点を目指すことです。地域活性化の点では、県や市町村の支援を受けながら足場ができつつあると実感しています。インターンシップを通じて様々な地域と関わりを持つ中で、最近では、地方自治体や企業側からも積極的にインターンシップの場を作っていただく機会が多くなってきました。

田口社長：いいですね。インターンシップの時に必要な教育を受けてもらえれば、卒業後、社会人としてすぐにご活躍いただけるわけですから。今後は、大学が終わってから企業に勤めるという従来の就職の流れも大きく変わっていくはずです。

学長：私もそう思います。一方、研究拠点という点においては、医学、薬学、獣医学が同じキャンパス内にあることが大きな特色ですが、今年6月には学内に岐阜県中央家畜保健衛生所が新たに開設されました。

田口社長：それは大きな需要がありそうです。私たち物流企業も含め、多くのビジネスにおいて外来生物によるリスクヘッジは必須の時代になりつつありますから。

学長：おっしゃる通りです。とりわけ岐阜県においては、畜産業はとても重要な産業の一つです。ところが、飛騨牛の飼育農家が減少しているという実情もあり、担い手の育成が急務となっています。

田口社長：なるほど。例えば、そうした分野に、海外からの留学生をインターンで派遣するのはいかがですか。留学生もかなり多いようにお見受けしますが。

学長：はい。留学生に研究者などを加えると600名ほどいます。特にアジアからの留学生が多く、最近では大学近くにモスクができ、ハラール専用の食料品店も営業しているほどです。

田口社長：そうですか。ハラールは大きな市場ですね。やはり宗教の影響力は大きい。私は多様性を認める日本の文化は、仏教が根底にあると考えています。仏教は他を排除する宗教ではないですから。

学長：確かにそうかもしれません。ちなみに御社では国際的にビジネスを展開されていらっしゃるわけですが、宗教や文化、お国柄の違いなどによって、対応に苦慮されたりすることはございますか。

田口社長：私自身、駐在経験がありますが、海外では組織運営やスタッフ管理に時間が割かれ、思うようにセールスを展開できないジレンマを抱えていました。そこで15年ほど前からはドイツに本社を置き、国際輸送を手掛ける大手物流企業と提携して輸送の実務などをお任せし、その分セールスに特化できる状況を作り出しました。現在は次の段階に移行し、海外の小売企業と手を組むことを考えています。私たちのお客様は販路を求めていますから、小売企業と連携すれば物流だけでなく販売先の確保というニーズにもお応えすることが可能になるわけです。ただ、現地ではガバナンスが効かない場面もあります。特にタイやインドネシアでは、最初は赤字でもいいからいきなり全国制覇を目指すといった企業が散見され、設備投資が過剰ではないかと心配になることもあります。

学長：なるほど。私たちもタイやインドネシアは特に農業でお付き合いが深いですが、同じような印象を受けますね。

田口社長：描くビジョンが大きいですよね。そしてスピードが速い。成長著しい国のダイナミズムを感じる一方で、検証スピードが追い付いているかどうか怖くなることもあります。

これからの日本は、
メイド・イン・ジャパンではなく
マネージド・バイ・ジャパンを強みにする
発想の転換を。

学長：ところで、最近はものづくりがスマート化するとよく言われます。ただ、とりわけ中小企業では、IoTやAIといった言葉だけが飛び交い、本質が理解されずに苦慮しているところが多いように感じています。この点はどのようにお感じになりますか。

田口社長：IoTは、いわばモノが喋るということです。物流でいえば、あるものが一定数を下回ったことをセンサーで認識し、自動的にオーダーするといった流れが出てきています。そうなれば、単純な発注作業は人間がやらなくてよくなる。そこで必要となるのが、日本人が得意とするマネージする力だと思います。

学長：センサーの情報を読み替えてどうマネージするのか。そこに日本の強みが発揮されると。

田口社長：そうです。かつてはメイド・イン・ジャパンがもてはやされましたが、その技術は今や海外の新興国にどんどんと流出しています。ただ、マネージする部分は、日本が絶対的に強い。新幹線の運行管理などが代表例です。「マネージド・バイ・ジャパン」へと発想を転換すれば、大きな可能性が見えてくると思います。

学長：最近では物流業界の人材不足なども叫ばれていますが、自動運転・隊列走行の実用化についてはどのように見ていらっしゃいますか。

田口社長：技術的には、すでに高速道路での実用化は可能だと思います。不確定要素の多い市街地においてどう対応するかが課題であり、当面は、高速道路のインターで荷物をピックアップするといった流れになるのではないでしょうか。ただ、人材確保という点では、それほど逼迫感はありません。当社の場合、toBの商品が大半であり、toCのように土日の配送や再配達の手間もありませんから。それでも、これはあくまで同業他社さんとの比較のお話であって、他業界に目を向けると、決して安穏とはしていられないと感じています。

経営に必要なのは、因数分解、PDCA、
フレーミング効果。
理系学生こそ、磨けば光るセンスを秘めている。

学長：御社ではスポーツの支援にも熱心です。これは創業当初からの伝統ですか。

田口社長：実のところ、労務政策の一環なのです。全国に拠点が広がる中で、社員の気持ちを一つにするため、私の父が野球部を立ち上げたのが始まりです。ただ、祖父である創業者は「球遊びしている暇があるか」と反対し、3年で全国大会に出場できなければ廃部という条件付きでした。

学長：それは初耳です。

田口社長：その後、12年連続で社会人野球の最高峰、都市対抗野球大会に出場するわけですが、私の父が野球部長を退いた後、3年間出場が途絶えた。すると「あの時の約束を覚えているか」と休部になったわけです。

学長：そうでしたか。休部になさった時には、実業団も厳しい時代なんだと想像しておりましたが、そういう約束があったわけですね。

田口社長：2014年に都市対抗で初優勝した時も、前年、前々年と2年続けて出場を逃しており、その年に出場できていなかったら休部でした。

学長：それは厳しいですね。ちなみに御社では、野球以外のスポーツも盛んですね。

田口社長：はい。空手道部では、世界空手道選手権4連覇を成し遂げた若井敦子さんに、監督をお願いしています。また、大垣市の企業10社と共にソフトボールチームも支援しており、協賛企業の社員たちが球場に応援に駆けつけ、とても盛り上がっているようです。スポーツは、みんなをまとめる大きな力があると実感しますね。

学長：なるほど。ちなみに今、ソフトボールに関連してお話が出ましたが、大垣市内には地元に強い愛着を持ち、成功されている企業がたくさんあります。御社も創業の地は萩原町(現・下呂市)で、そこから大垣市に根付き、いまだに西濃という名称を使い続けていらっしゃるわけですが、大垣市の土地柄についてはどのようにお考えですか。

田口社長：当社の創業者が大垣市に来たのは、3つの要素があったからです。まず平野であること、2つ目に水が豊かであること、3つ目が交通の要衝であること。運送業ですから、水があるところに工場ができる。すると、運ぶ荷物が自然と出るんですね。萩原町の頃は主にダムの部材などを運んでいたのですが、大垣市に来てからは、加工製品を運ぶようになりました。また、日本の中心にあり、創業者が目指す全国制覇にもちょうど良かったわけです。大垣市に他の企業さんが根付いているのも、こうした地の利への理解があってのことだと思います。岐阜市よりも人口は少ないですが、小さいからこそまとまりがいいのも利点です。

学長：最後に、岐阜大学に対するご要望があればお聞かせ下さい。

田口社長：岐阜大学は地域のトップブランドです。学術的な部分でも日本の中核を担えるだけの差別化要因がありますし、ぜひ優秀な人材をたくさん輩出してもらい、この地域を牽引していただきたいです。これからは、東京などの大都市でなく、地方からでも世界展開ができる時代です。居住もしやすく、人材の確保やコストの面でも優位性があると思います。

学長：やはり田口社長もおっしゃるように、なんとか卒業生を地元に根付かせていきたいと思います。私たちも、岐阜に何があるのかという情報をもっと提供しなければいけないと感じておりまして、一皮むけた大学のあり方を模索しているところです。また最近では、特に理系の学生たちに、経営的なセンスを身に付けてもらえるような教育をしていきたいと動いているところです。

田口社長：理系の方は絶対に経営に向いています。経営とは大雑把にいえば、因数分解、PDCA（plan-do-check-act）サイクル、フレーミング効果の3つをうまく活用することです。物事を因数分解し、それを実験の仮説検証と同じようにPDCAサイクルで回していく。そして、フレーミング効果によって「私たちはできる」と強く信じる。これができるのは、理系の方に多いのではないかと感じます。コンサルティングファームの方々にも、実は、理系出身の方がとても多いですから。

学長：そうですか。こういったお話はぜひ理系の学生たちに聞かせてあげたいですね。

（対談：2017年8月23日）

【特別対談】

IT化の波に乗り事業拡大を続ける一方で、要職を歴任。戦争での悲惨な体験から、何事も断らない姿勢を貫く。

株式会社インフォファーム
取締役会長
辻 正氏

×

岐阜大学 学長
森脇 久隆

辻 正氏 略歴

昭和14年　岐阜市から中国東北地区旅順市に移住
昭和20年　旅順工科大学予科入学
昭和22年　この間ソ連軍、中共軍政下で生活
　　大連港より引揚船にて帰国
平成10年　中部コンピューター株式会社 代表取締役就任
　　株式会社中部 代表取締役就任
平成16年　中部コンピューター株式会社より
　　株式会社インフォファームに社名変更
平成19年　株式会社インフォファーム・株式会社中部合併
　　代表取締役会長就任
平成25年　取締役会長就任

主な役職

岐阜県中小企業団体中央会会長
岐阜流通センター共同組合連合会会長
全国地域情報産業団体連合会顧問　他

学長：これまでも様々な分野の方のお話をお聞きしてきましたが、今後ますますITが大事な時代に突入していくことを踏まえ、辻会長にぜひご登場いただければと対談をお願いした次第です。対談に先立ちまして辻会長のご著書を拝読しましたが、相当早い段階からIT化への舵を切られたようですね。

辻会長：実は「インフォファーム」という今の社名に変更するときは、梶原拓前岐阜県知事にもご相談しました。創業時はタイプライターなどの機器の販売と保守が事業の柱だったのですが、梶原さんが「これからはITの時代だ」と早くからおっしゃっておりまして、本当にあの方は先見の明がおありでした。

学長：そうでしたか。中部タイプさんについては、かつての医学部（岐阜市司町）の隣にあり私もよく記憶しております。あの頃タイプライターが不可欠の時代でしたから、学会発表の時期が近づくと、優秀な社員さんを押さえられるかどうかが一番の懸案事項でした。

辻会長：そうでしたか。そんな昔から私どものことをご存知だったとは驚きです。

学長：ええ。あの当時は本当に助けられました。

辻会長：確かにあの近辺は白衣を着た病院関係の方がたくさんおられました。私にとっても思い出深い場所ですが、最近、医学部があったことを記した石碑ができたとお聞きしました。

学長：そうです。2017年6月に石碑の完成を記念して除幕式も執り行いました。それにしても、当時と比べるとITの広がりは隔世の感がいたします。

辻会長：本当にそうです。ITの時代が到来するということで、コンピュータ部門を独立させ、情報関連部門とファシリティ部門を引き受けて設立したのが当社です。

学長：本当に時代の先端を走り続けていらっしゃいますね。ご著書を拝見しても、時流に即して実に適切な判断を下しておられ、驚きました。また同時に、数多くの団体の要職も務めてこられました。

辻会長：全国地域情報産業団体連合会の会長を12年、岐阜県中小企業団体中央会の会長を20年、岐阜流通センター協同組合連合会の会長に至っては35年務めております。岐阜県中小企業団体中央会でベトナム・ハノイを視察した際には色々なご縁ができましたし、現地の大手IT企業のトップとも親交を深め、最近も「ぜひ岐阜に足を運びたい」と言ってくれています。

学長：いつも辻会長のお話をお聞きすると、人との繋がりを大切にされ、頼まれたことはできる限り引き受けられて来ましたね。やはりこれは戦争で大変なご苦労をされたことが根底にあるのでしょうか。

辻会長：左様です。私の父は当時のソ連軍に殺されました。42歳の若さでした。私の手を握りしめながら「痛い、痛い」と言いながら死んでいったのです。こうした経験から、何かを頼まれると嫌と言えずにやってきたわけです。今振り返ってみても本当に良かったと感謝しています。

話題の「AI」「IoT」に安易に飛びつくのは危険。まずは目的を明確化し、じっくり取り組むことが大切。

学長：最近ITの分野では、「AI」「IoT（モノのインターネット）」といった言葉だけが先行し、何か物事を安易に考えてすぎているのではないかと危惧しているのですが、辻会長はいかがお考えですか。

辻会長：全くその通りです。私どもは本業ですから日々ITと向き合い続けているわけですが、昨今はあらゆる業種でIT化に取り組まざるを得なくなった。ただ、重要なのは決して慌てないということです。最近ではマスコミが連日のように「AI」「IoT」などと囃し立てています。あまりに「IT」という言葉が氾濫しているの

で「喫茶店でコーヒーじゃなくてアイスティーが来た」なんて冗談も出るくらいです。だからといって、導入を急いでもうまくいきません。

学長：私は様々な業種の方とお会いしますが、多くの方がITというカセットをポンと入れれば動き出すというような考え方をしている気がするのです。最近でも「AIがトップ棋士に勝った」と話題になりましたが、そのプログラムで囲碁ができるわけではないわけですから。

辻会長：私たちは専業ですから、慌てずじっくり作り込まないと危ないことを経験的に理解しています。急げば大変なことになる。そういう性質のものです。私たちはIT化をサポートする立場ですが、本来、システムの構築自体はお客様自身でできてしまう。例えば、外科のシステムを作るには、外科の先生が作るのが一番なのであって、勝手が分からず作ってしまうとダメになるわけです。経営が分かっている人は、遅かれ早かれIT化に必ず取り組むと思いますが、まずは経営を理解しないといけない。だから時間がかかるのです。

学長：そうですよね。経営が理解できていてフローが書ける人だからこそ使いこなせるのであって。

辻会長：そうなんです。バランスシートも分からず、闇雲にシステムだけを導入しても良い効果は出てきません。私の会社が行っているのはあくまでサポート。私たちが机上で考えたものを持っていっても成功しませんし、余計に人員が必要になるだけですよ。

学長：専門家である辻会長からこうしたお話が聞けて自信になりました。「危ない」と私からお伝えしてもなかなかご納得いただけないもので。

辻会長：学長に本質的な部分をご理解いただけていると思うと、こちらもうれしいですね。

学長：どういう場面で使いたいかという部分は、自分たちで見つけないと。目的を明確化することが第一ですよね。

辻会長：そうです。単純に「コンピュータをどう使うのか」と、「IoTやAIをどう活用するのか」というのは全く次元の違う話です。急いでも無駄なお金を使うだけですから、ぜひともゆっくり腰を据えて取り組んでもらいたいです。

中小企業にとって、岐阜大学の学生は「高嶺の花」。まずは地元の優良企業を知る機会を作ってもらいたい。

学長：私たちは岐阜に立地する大学ですから、地域活性化の中核拠点であることを第一に考えております。その中でも大きなテーマの一つが、卒業生を地元に定着させることです。

辻会長：それはぜひお願いしたいです。

学長：私たちも学生たちに、地元の優良企業を知る機会を増やしたいと考えています。現在、単に会社見学をするのではなく、インターンシップ期間を設けて実際の仕事を見て体験できる試みを進めていまして、2016年には80人だった参加者が2017年には140人まで増加し、学生からも「地元にこんないい企業があったのか」と喜んでもらっています。

辻会長：当社では、取引先の大手企業から「定年後に使ってくれないか」とお願いされることがよくあります。ただ、本音を言えば「なぜ最初から当社に来てくれないのか」と。そもそも当社であれば、ずっと長く働き続けられるわけですから。確かに大企業は魅力的に映るかもしれません。ただ、その一方で厳しい面もあることを知っていただきたいです。

学長：若いうちに東京に目が行くのはよく分かります。ただ、東京に行って大企業に勤めるのと、岐阜県にある会社に勤めるのと、どちらがいいのか。先々のことも見据えて考えてほしいものです。

辻会長：私どもの会社でも、東京に事務所があります。東京で活躍することを希望されるのであれば、当社でも叶うわけですから。

学長：そうなんです。今やほとんどの会社が、東京や海外に営業所を持っていらっしゃる。だから働く場所は選択できるんだと。地元の企業を選んだからといって、活躍の場が制限されるわけではありません。最近ではやっと学生たちもそのことに気付き始めてきました。

辻会長：実は先日、岐阜県中小企業団体中央会の役員に聞き取り調査をしましたが、「岐阜大学は関係ない」と話す方が大半でした。それは、岐阜大学の学生には「どうせ来てもらえない」と最初から諦めているから。ただ、宝のような企業が地元にたくさんあるわけです。

学長：そうです。岐阜にはそういう会社がとても多い。また、地元を基点にして素晴らしい国際展開をされている企業も少なくありません。

辻会長：俗な言い方ですが、「田舎の金持ち」と言いますか、岐阜は地味ですが力はある会社が多い。そこに飛び込んでいただいて、ぜひとも自分を磨いてほしいです。たとえ同族会社であっても、最近の経営者は「子どもを必ず後継者に」なんて決めつけていませんよ。本当にやってくれる人材ならやらせる。今の経営者は割り切っています。

学長：ここにきて地元を希望する学生がぐっと増えたのも、そのあたりが見え始めたのかなと。東京本社の大企業に入社できたとしても、50代後半に差し掛かった段階で、次はどうするんだとなりますから。

辻会長：そう。そんなことになる前に見極めて欲しいです。今の経営者は、優秀な人材が来てくれるなら「将来の副社長や社長を約束してもいい」というくらいの気持ちだと思います。社長たちに話を聞いても、誰しも優秀な人材を渇望しています。ところが、岐阜大学の入口に行きますと、どうしても尻込みしてしまう。私たちにとっては高嶺の花なんです。

学長：インターンシップも本格的に動き出しましたし、今後は窓口を見えるようにするなど、地元企業からの声を受け取れる体制を整備していきます。

辻会長：そうしていただけるとありがたいです。

学長：最近では、工学部を卒業した学生が、「宮大工の仕事がしたい」と中津川にある工務店に就職し、岐阜公園の三重塔の修復に来ていたりします。学生たちも、単純に大企業を目指すのではなく、自分がやりたいことを定めたうえで、どんな会社があるのかを調べているようです。

辻会長：そうですか。岐阜大学と地元の中小企業がもっと近づき、中小企業の窓口みたいなものができれば、「うちにもぜひ来て欲しい」と皆さん手を挙げるのではないでしょうか。学生さんたちにとっても、先行きが不安定な時代ですし、安定した地元企業に就職するという選択肢をぜひ知ってもらいたいです。最近では金融機関ですら大変な時代ですからね。

学長：それでなくても銀行は定年が早いですからね。

辻会長：そうです。人生100年と言われる時代です。当社であれば希望さえあれば60歳を超えても働けます（現在13名）。大企業で早く定年を迎えるのと、どちらが良い選択なのかぜひ見定めてもらいたいですし、岐阜大学にはそのための道を開いてほしいと思います。私たちも、学生さんたちのために包み隠さず本当のことをしっかりお伝えしますから。

（対談：2017年12月11日）

【特別対談】

外国人観光客も増加し、盛り上がりを見せる飛騨地域。一方で、長良川周辺をいかに活性化していくかが課題。

岐阜県観光連盟 会長
岸野 吉晃氏
×
岐阜大学 学長
森脇 久隆

岸野 吉晃氏 略歴

昭和51年　名古屋鉄道株式会社入社
平成16年　名鉄バス株式会社 取締役
平成19年　同社 常務取締役
平成21年　同社 専務取締役
平成22年　岐阜乗合自動車株式会社代表取締役専務
平成23年　同社 代表取締役社長

主な役職

公益社団法人 岐阜県バス協会 会長
一般財団法人 岐阜県交通安全協会 会長
一般社団法人 岐阜県自動車会議所 会長
FC岐阜後援会 会長

学長：岐阜大学は、機械工学や建築・土木、農畜産業などの分野には割と明るいですが、その反面、岐阜県の主要産業の一つである観光業には疎い面があります。ただ最近は、卒業後を見据えた人材育成という観点からも、岐阜県の観光業をきちんと理解する必要があるだろうと強く感じます。そこで今回は、岐阜県観光連盟会長を務める岐阜乗合自動車の岸野社長に、観光業を取り巻く最近の動向などについて詳しくお聞きできればと考えております。

岸野会長：私どももこうした機会を設けていただき大変光栄です。観光業については近年、日本政府が積極的に後押ししています。これは、国内の労働生産人口が減少し、経済規模が縮小する中で、外国人観光客を誘致して経済を活性化させるのが狙いです。

学長：当初、政府が掲げた数値目標には驚きましたが、その後、順調に推移していますね。

岸野会長：ええ。2020年の4000万人突破が目標でしたが、おそらく達成するだろうと見ています。このように観光業全体が盛り上がりを見せる中、岐阜県では先進的な取り組みを以前から進めてきました。「観光の基幹産業化」を掲げて積極的にPR活動などを展開しており、現在では県下に白川郷をはじめ7つの世界遺産があります。

学長：岐阜市でも、労働者の90％が広義のサービス業に従事しているという数字が出ています。ものづくりが盛んな一部の地域を除けば、岐阜県にとって観光が大きなキーワードであることは間違いありません。

岸野会長：おっしゃる通りです。全国的に見ても岐阜県の観光の知名度は上昇し続けています。また、海外からのお客様も増え、ユダヤ系の外国人観光客の間では、中部国際空港から八百津町の杉原千畝記念館を訪れ、白川郷や高山、金沢に向かうルートが定着化しているようです。ただ、県全体では、観光業の中心は飛騨地区であり、長良川地区は手薄です。岐阜市の旅館も部屋の稼働率は高いものの、実際には愛知県で予約が取れない方が利用されるケースが多いです。今後は長良川周辺をいかに盛り上げていくかが課題だと思います。

学長：岐阜大学でコンベンションを誘致する際、ネックとなるのが宿泊先です。特に若い方は、多少狭くても一人部屋を希望されるため、ビジネスホテルから順に埋まり、一宮や名古屋のホテルに流れてしまうことも少なくないようです。

岸野会長：岐阜市内で宿泊し、地域でお金を使っていただくからこそ、地域経済が潤います。学長からご指摘を受けた宿泊施設の改善を含め、やれることはたくさんあるだろうと感じています。

観光の柱となる「食」での岐阜大学ブランドの確立に期待。キャンパス内の植物や美術品も、魅力的な観光資源に。

学長：最近では人手不足を訴える業界が多いですが、観光業も相当厳しいでしょうか。

岸野会長：ええ。深刻です。ホテル・旅館業は拘束時間が長く、土日も休めない場合が多いですから、どうしても人が集まりにくい。かといってロボットやAIで代替できる仕事ではありません。すでに仲居さんが足りずに予約を受けられない旅館も出てきているようです。岐阜大学の学生さんたちにも、観光業に関心を持って頂けるとありがたいです。

学長：まだ一部ではありますが、工学部の中にも観光業に興味を持つ学生が徐々に出てきています。先日も産学金官連携のプロジェクトで、外国人がSNSで発信する情報をもとに顧客満足度を調べるアイデアを発表した学生がいました。

岸野会長: そういえば先日、応用生物科学部の学生さんが飛騨の天領酒造さんと産学連携で甘酒を開発されたとお聞きしました。

学長: ええ。岐阜大学のキャンパス内に2019年、醸造や発酵なども研究できる岐阜県食品科学研究所が竣工予定です。そこで、様々な連携の話が進んでいます。

岸野会長: 観光業にとって「食」は大切な柱です。今後も色々なコラボ商品が生まれることを期待しています。近い将来、岐阜大学ブランドが確立されるといいですね。

学長: 少しずつ手掛けていきたいと思います。今のところは、大学内の農場で栽培している果物のジャムが人気でしょうか。中でも珍しいのがバラのジャムです。

岸野会長: バラですか。それは面白いですね。こうした商品は学内で販売されないのですか。

学長: もちろんできますが、常時提供できないのがネックでして。確実に販売できるのは、大学祭で行われる秋のバザーぐらいです。

岸野会長: これは前々からお願いしてみたいと考えていたのですが、例えば、大学祭で岐阜県の地場産品を学生さんに販売していただくのはどうですか。そうすれば、地域の方々を巻き込んでより一層盛り上がると思いますが。

学長: 確かに面白そうですね。ちなみに、岐阜バスさんでは「食」を柱にしたツアーなどを数多く企画されていますが、こうしたアイデアは社内の方が考えられるわけですか。

岸野会長: そうです。ただ最近はマンネリ化していると感じています。例えば、岐阜大学の学生さんと一緒に、SNSを絡めた体験型の旅行商品を企画できれば面白いかもしれませんね。また、岐阜大学のキャンパス内にも色々な観光資源が眠っている気がしています。

学長: 私たちも今それを精査しているところです。来年迎える創立70周年の取り組みの一つとして、タブレット端末の案内を見ながら、キャンパス内を散策してもらう企画を構想中です。

岸野会長: 最近は各地で産業観光が人気を集めていますし、大学内の様々な研究施設を見て回るツアーはとても面白いと思います。

学長: 学内には研究の一環で40種類以上の珍しい花や木を植えています。また、教育学部では、教員や学生の制作した美術作品がたくさん残されています。絵や書については室内で保管していますが、彫刻などは芝生の広場に野外展示されており、こうした植物や美術品を見学してもらうためのパンフレットも制作中です。

岸野会長: 医学部や工学部のイメージが強い岐阜大学ですが、そのほかにも、魅力のあるものがたくさん眠っているわけですね。

学長: ええ。医学部でも、岐阜インターチェンジの完成を機に、アジア全体に通用する医療施設を作り上げ、メディカルツーリズムの拠点を目指す計画を検討しているところです。

大学時代を岐阜で過ごす学生のみなさんに、
岐阜の観光に興味を持ち、
良き理解者になってもらいたい。

学長: 岐阜バスさんには、学生たちの大切な足としてお世話になっております。入学試験の際には、岐阜バスの車両がずらりと待機している様子が壮観でした。特に2つのボディを連結器で繋いだ「清流ライナー」は、多くの学生が一度に乗車できて大変助かっています。

岸野会長: おかげさまで「清流ライナー」は、遠方から見学に訪れる方がたくさんいらっしゃるほど注目を集めています。大学の路線に連節バスを導入するのは、岐阜大学が全国で2番目ですが、学生さんの輸送にはうってつけの車両だと思います。

学長: 私もそう思います。ただ、愛知県などから通学する学生の割合が多いため、朝の時間はどうしても混雑します。そこで通学時間を分散させるため、岐阜駅近くにサテライトキャンパスを設置しました。ここで1時間目が受講でき、1日平均200名ほどが利用しています。

岸野会長: 愛知県からの通学が多いんですね。せっかく岐阜で学生生活を過ごすわけですから、岐阜の観光資源に興味を持ち、良き理解者になってもらえるとうれしいですが。

学長: 私たちもそう感じています。岐阜城は知っていても、川原町を知らない学生は多いようですから。こうした状況は就職先についても同じです。岐阜県と連携して県下企業のインターンシップを実施したところ、学生たちからは「こんないい企業があるなんて知らなかった」といった声が聞かれました。こうした面は本当に手薄だったと反省しているところです。

岸野会長: 例えば、大学の教養課程で、岐阜の伝統文化を学ぶ講座などはあるのですか。

学長: 「岐阜学」という講義群があります。全学年を対象に25コースが用意されています。

岸野会長: 必須科目にして頂いてもいいのではないですか。

学長: そうですね。そこで平成25年には「地域協学センター」を設置するなど、地元に関連した教育をできる限り充実させていこうと準備を進めています。

岸野会長: せっかく岐阜で学ぶわけですから、この地域の伝統文化にも触れてもらいたいです。例えば、最近では東濃の地歌舞伎が人気です。岐阜大学にも地歌舞伎研究会のようなサークルがあるといいですね。

学長: 外国人留学生については、日本文化に触れる機会を積極的に設けるようにしています。これまでも郡上おどりや大相撲名古屋場所、能楽を見学したり、十二単の着付け体験を行ったりしてきました。昨年からは東濃の地歌舞伎も加えています。日本人学生よりも留学生の方が手厚いかもしれません。

岸野会長: 先日、金沢大学の新卒の女性が金沢の芸妓さんとして活躍されているという話を耳にしました。岐阜の芸妓さんも伝統文化の象徴の一つです。岐阜大学からこうした世界に入る方がいてもいいと思います。バスに乗車される様子を見ていると、岐阜大学の学生さんは総じて真面目で大人しい。逆に言えばもう少し個性豊かな方が育ってきてもいいのではないでしょうか。

学長: おっしゃる通り、そういった印象が強いかもしれません。

岸野会長: 最近では大学時代から起業する学生さんもいらっしゃるようですが、岐阜大学ではあまりこうした話を聞かない気がします。

学長: 確かにそうですが、素質は十分にあると思います。先日もNTTさんが主催するアプリ開発コンテストで優勝した学生がいました。あいさつに来た時に聞いたところ、将来の目標はあくまで企業への就職。自分で起業するという考えはないようでした。これは、岐阜大学に限らず、東海地区

において学生ベンチャーを支援する体制が十分に整っていないのも一因だと感じています。ただ、今後はこうした活動を支援する動きも徐々に活発化していくはずです。

岸野会長: そうですか。期待しています。実は先日、テレビ番組で他大学の学生が開発した「しゃべるバス停」が紹介されているのを見ました。岐阜大学の学生のみなさんにも、私たちでは思い付かないような画期的なアイデアで、ぜひ岐阜県の観光業を盛り上げて頂けるとうれしいですね。

（対談：2018年3月16日）

Special
Interview

特別対談

2008年ノーベル物理学賞 受賞
益川敏英先生 × 岐阜大学 学長 森脇 久隆

**ノーベル物理学賞を受賞された益川敏英先生と
森脇学長が対談をしました。**

若い人には、憧れとロマンを持ってほしい。
そこに近づく努力が成長への力になる。

“名古屋で科学が動いている”ことへの衝撃と憧れ。高校時代に猛勉強した経験が、学問探究の糧に。

学長：益川先生は岐阜市立中央図書館がある「ぎふメディアコスモス」の名誉館長を務めておられるということで、岐阜にも所縁をお持ちですね。その縁で、私も３回ほど先生にお目にかかっています。今回は、益川先生の著書『僕はこうして科学者になった』にもある「若い人たちには憧れとロマンを持ってほしい」というメッセージをテーマに、お話を伺えたらと思います。最初にお聞きしたいのは、ご自身のなかで“憧れとロマン”はいつ頃芽生えてきたかということです。

益川先生：高校１年生の９月頃ですね。それまでは全然勉強に関心がなかったんです。仲のいい友人が向陽高校へ進学するから「じゃあ僕も一緒に」という程度で進学し、１学期の頃は何も考えていませんでした。その年の９月に偶然、子ども向けの科学雑誌で、名古屋大学の坂田昌一先生が大変有望な理論を発表されたという記事を目にしました。それまで、科学なんていうのは19世紀までにヨーロッパで完成したものだと思い込んでいたので、“名古屋のおらが町で科学が動いている！どういう具合に科学をつくっているのか見に行かねば”と咄嗟に思ったわけです。そこで、名古屋大学に行くという目標ができました。その後、高校1、２年生では自分の好きな数学と物理を勉強して、３年生になって名古屋大学の受験参考書の問題を片っ端から解きました。数学や理科はほぼ完璧になったので、３年生の３学期に日本史と世界史を1日16時間かけて暗記しました。これでは体を壊すと思って、２月は休養して３月に試験。自己採点したら合格点が取れていたので、友人とスキー場へ遊びに行ったら、先生に「まだ終わってないだろう！」と怒られた思い出があります。

学長：名古屋大学に坂田先生がいる、という情報をキャッチしてその存在へ近づこうとする。その“行動”がなかなかできない人が多いですよね。

益川先生：私は“弟子にしてもらおう”というより、ただただ“科学の現場を見学に行かねばいかん”という感覚でした。そして、学問に熱中していったのは、何より大学で出会った友人の存在です。夜通し、喧々諤々（けんけんがくがく）と議論し合っていました。少々乱暴な議論をして「お前とは絶交だ！」なんて言っても、１週間くらい経つとまた仲は戻るんです。その友達がいたおかげでしょうね。今でも全員と音信があります。

学長：それほど議論をされた原動力は何だったのでしょうか。

益川先生：高校時代の背伸びした勉強ですね。おかげで数学や物理は、多少友達よりは知っているぞ、と。今でも覚えていますが、名古屋大学に入って最初の講義は『解析概論』で、助教授はいきなり“デデキント切断※”という難しいお題をぶつけてくるわけです。そこで、私はその時間の最後に「実数は稠密（ちゅうみつ）であるということを証明したので、四元数でも解析学は作れますか？」と質問したんです。学友たちに“俺はこんなこと知っているぞ”と誇りたかったんでしょうね。そうしたら次の生物の講義で、後ろの学友からレポート用紙が回ってきて、６つの問題が書いてあるんです。《これに解答せよ》と。決闘状ですね。そういう仲で、共に切磋琢磨する友人がいたことは財産です。

※数学の実数論において用いられる理論

学長：先生は読書家だとお聞きしていますが、自分で本を選ぶようになったのはいつ頃からですか。

益川先生：高校時代の後半です。積極的に古本屋巡りをしました。当時は戦後で、本は今ほど出回っていないんですね。自分の研究範囲の本はほとんど頭に入っていましたから、もう少しステージの高い本を読んでいました。本が好きで、学生の頃から図書委員に立候補していたので、製本の技術も持っていますよ。

切磋琢磨する学友と、真剣に対話できる先生に出会い、大学での学び方や学問に対する精神を教わった。

学長：実は私どもがいろんな大学生の成績を分析した結果、興味深いデータが得られました。それは、入学試験で好成績だったことよりも、入学後1年生の前期にどれだけ勉強したかということの方が、卒業成績への相関関係が高いという結果です。益川先生やご学友は、大学入学当初からストイックに勉強されていたのでしょうか。

益川先生：そうですね。当時は物理と数学の80人クラスで、我々の仲間はみんな教職の単位は取っていませんでした。「大学へ入ったからには研究者になるんだ」と、背水の陣で研究者を目指していましたね。下手に教職単位を取るとそちらに流れちゃうから、と。

学長：研究者という夢に真っ直ぐぶつかっていかれたのですね。

益川先生：時代背景が違うと思うんですね。我々が大学に入ったのは1958年で、戦争も終わり、社会が落ち着いた頃です。しかし、海外留学まではまだ念頭にないような時代ですね。日本は戦争で国土も失ったし、何もない。鉱物資源もない。我々の頭だけで世界と対抗しなきゃならん、と。誰が言い出したわけではないですが、そういう気概で勉強するんだという空気がありましたね。

学長：昭和33年ですね。翌年に当時の皇太子殿下がご成婚されて、高度経済成長期の入り口の時代です。その頃の名古屋大学理学部の雰囲気というのはいかがでしたか？

益川先生：まだ八高（名古屋大学の前身の一つとなる

旧制第八高等学校の通称）の雰囲気が残っていましたね。いい意味でバンカラというか。先生も下手なことしていればギャフンと言わすんだ、と。その頃、良い先生との出会いがありました。中野藤生先生という統計物理の専門の先生です。当時、我々が質問に行くと他の先生は逃げるんですが、中野先生だけはいつも大きな椅子の上にあぐらをかいて座っているんです。私たちは先生と話したいから、無理やり質問状を作って持っていくわけです。すると「そんなこと急に聞かれて分かるか。この本を貸してやるから自分で調べろ」とおっしゃる。先生とは、高校までは知識を教えるから“教師”、大学は知らないことを調べる方法を示す“研究者”なんだと、この先生から教わりましたね。

学長：中野先生は調べ方や、大学での学び方を教えてくださったんですね。たしかに、高校までは“授業”ですが、大学は“講義”です。同じく、大学に入れば“生徒”ではなく“学生”である、と私も入学式でよく学生たちに話しています。

益川先生：そうです。具体的に答えを教えてもらうのではなく、“自分で調べる”。中野先生は、そういう精神を教えてくれたんですね。それに、どんなことでも相手をしてくれました。学生と同じ目線で、先生が喧嘩するんですよ。

学長：当時、益川先生は二十歳前後ですね。真正面からぶつかられると、先生のほうもファイトがいりますね。現代の学生と教授の関係についていえば、一時はさまざまな問題から距離が離れていたこともありましたが、今はまた近づきつつあります。学生の取り組みや質問に対して、しっかり向き合い、議論の相手になる先生が増えていますね。学生の意識も変わってきており、大学で勉強することがどういうことか、大学生としてやることは何かを再認識できる時代になってきたと思います。

研究者になるという夢に邁進した学生時代。“憧れ”に対して、まずは近づき、何かを始めること。

学長：先生は大学時代、困難にぶつかったとき、どのように乗り越えていたのですか。

益川先生：基本的には友人との議論ですね。解決しようもない壁にぶつかったときには、先生の所へ行って示唆をいただく。仲の良い友人3、4人でしょっちゅう集まって議論していました。そうそう、伊勢湾台風のときはちょうど大学3年生だったんですが、うちは砂糖屋なんでね、家に雨が降り込んで大騒ぎだったんです。親父は砂糖の片付けをしていましたが、自分は「大学がどうなっているか分からんので見てきます」と言って自主ゼミの本を片手に大学へ行きました。そしたら、校舎の廊下が曲がってしまっていてね、そんな中で持ってきたテキストを取り出してセミナーをやっていました。

学長：セミナーということは他のご学友も来られていたのですか。

益川先生：そういうことです。みんな来ていましたね。他にも霧ヶ峰の山頂までA4のアート紙を持って行き、セミナーをしたこともありますよ。大した意味はないんですが、「おれたちは研究者になるんだ、他の友達とは違うんだ」という意気込みみたいなものがあったんでしょうね。

学長：先生は当時から学問に対して、“憧れ”があったのでしょうか。

益川先生：そうですね、憧れに向かって近づいていくんですね。たとえば、野球選手のイチローに憧れたとしたら、そこに近づきたいと思う。そして実際やってみて真似をしてみる。そうすることで、自分はどうも打者よりも捕手のほうが向いている、などと分かってくるんですね。憧れから何かを始める。それが、若者が成長するための原動力だと思っています。

学長：なるほど。今の若い方たちもみんな憧れを持っているんですが、就職というものがどうもチラついて、学問に興味を持てないと言う学生もいます。しかし、自分が何になりたいか、どうありたいかとは別に、憧れやロマンを持って“何か掴めるかわからないことに向かっていく”という力が大事なのですね。今憧れていることを仕事にするかは別として、それを持ち続けることが生きがいに繋がると思います。

益川先生：そうです。若者である以上、必ず憧れを持っていると思うんです。それを、“大事にする”というより、それに“近づく”ことをしてほしい。イチロー選手に憧れているなら、イチロー選手のこと何でも知っているくらいにね。そうすると、その中からまた新しいものが生まれてくるんだと思います。

（対談：2017年11月22日）

【学長追記】このあと対談の話題はネコから相撲、映画へと移りながら大いに話がはずみましたが、それらについては、またご紹介の機会があれば、ということにさせて頂きます。

益川 敏英 氏　略歴

1940年愛知県生まれ。理論物理学者。専門は素粒子理論。
1967年名古屋大学大学院理学研究科修了。名古屋大学理学部助手、京都大学理学部助手、東京大学原子核研究所助教授を経て、1980年京都大学基礎物理学研究所教授、1997年同研究所所長に就任。2003年から京都産業大学理学部教授。2008年ノーベル物理学賞を受賞。
現在は京都産業大学益川塾塾頭、名古屋大学特別教授・素粒子宇宙起源研究機構長。

大学北から岐阜大学キャンパスを望む
石谷山（中腹）より撮影
岐阜大学名誉教授　若井 和憲

国立大学法人
岐阜大学
GIFU UNIVERSITY

「対談集」について

岐阜大学では、大学の運営に活かすため、学長と外部有識者との対談を行っています。対談の様子は大学ホームページに掲載しておりますが、大学広報誌「岐大のいぶき」特別号として取りまとめ、発行いたしましたのでご覧ください。　（岐阜大学広報企画室）

岐大のいぶきは Web からもご覧いただけます！
http://www.gifu-u.ac.jp/about/publication/publications/ibuki.html

「岐大のいぶき」についてのご意見ご感想をお待ちしております。

送付先 / 岐阜大学総合企画部総務課広報室広報係　〒501-1193 岐阜市柳戸 1 番 1
TEL 058-293-2009　FAX 058-293-2021　Email kohositu@gifu-u.ac.jp